

## Injury Alert (傷害速報)類似事例

## No. 55 プラスチック製シールによる咽頭異物 類似事例 1

事例	年齢：2歳2か月 性別：男児 体重：11.3 kg 身長：87.7 cm	
傷害の種類	誤飲	
原因対象物	ツロブテロール貼布剤 (1mg) 使用時に剥がす透明フィルム	
臨床診断名	食道内異物 (透明フィルム) による食道狭窄および気管狭窄	
医療費	入院費・外来通院費の合計 3,720,000 円	
発生状況	発生場所	自宅
	周囲の人・状況	誤飲には気づかず。喘鳴出現と、その精査の過程で発見された。 ツロブテロール貼布剤 (1mg) は兄に対し処方されたものであった。
	発生年月日・時刻	2011年3月頃 (1歳8ヵ月頃)、日時不明
	発生時の詳しい様子 と経緯	2011年3月頃よりよく嘔吐するようになった。同年5月、吸気性喘鳴にて近院にて治療を受けるも症状が改善しないため、難治性のクループ疑いにて、小児科紹介入院となった。入院加療後一旦退院となるも、吸気性喘鳴が続き、8月には安静時にも吸気性喘鳴を認めるようになり再入院となった。胸部 X-P に異物が映らず、CTにて気管狭窄像 (図1) を認め、同年9月再入院となった。
治療経過と予後	2011年9月、小児外科へ転科となった。上部食道造影にて食道狭窄を認めた。上部消化管内視鏡検査で食道内に透明フィルムを発見した (図2-A) が、内視鏡による経口的異物除去が困難であった。外科治療の方針とし、一時的に胃瘻を造設し、胃瘻から食道へ内視鏡を進め異物を観察した (図2-B)。異物を経胃瘻内視鏡的に除去した。除去部から排膿を認めた (図3-A, B)。異物はツロブテロール (1 mg) のフィルム部分であった (図4)。胃瘻を閉鎖して手術を終了した。同年10月、食道狭窄症状が続き、全身麻酔下食道バルーン拡張術を施行した (図5)。その後しばらくの間、食道狭窄による嚥下障害と気管狭窄による喘鳴を認めたが、異物除去後は次第に症状軽減し、およそ3か月で喘鳴、経口摂取障害とも軽快した。食道造影にて食道壁不整が残るが摂食障害はない状態である。	

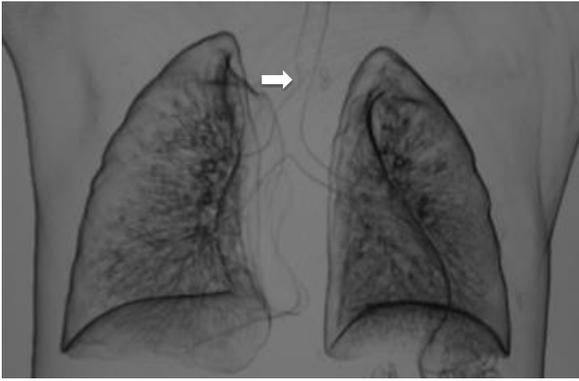


図 1. 胸部 CT

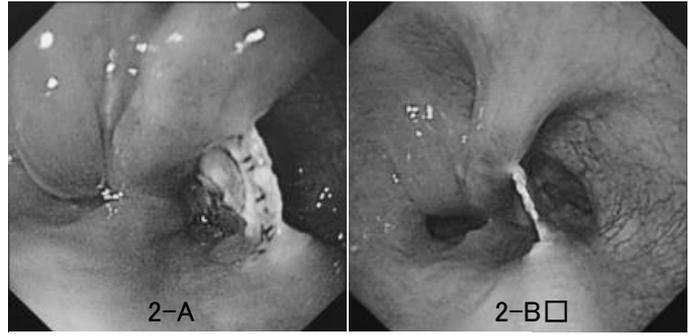


図 2. 内視鏡検査

2-A. 経口の消化管内視鏡

2-B. 経胃瘻の消化管内視鏡

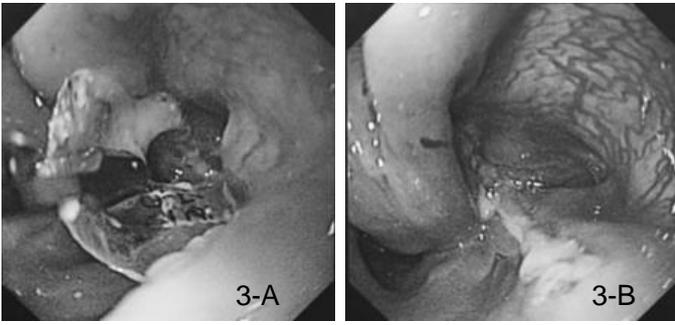


図 3. 経胃瘻内視鏡的食道異物除去

3-A. 鉗子による内視鏡的異物除去

3-B. 異物除去後排膿

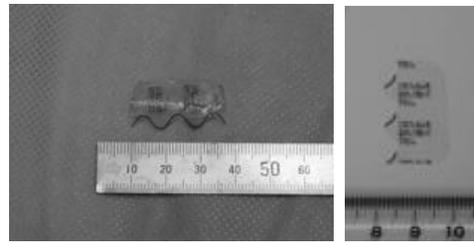
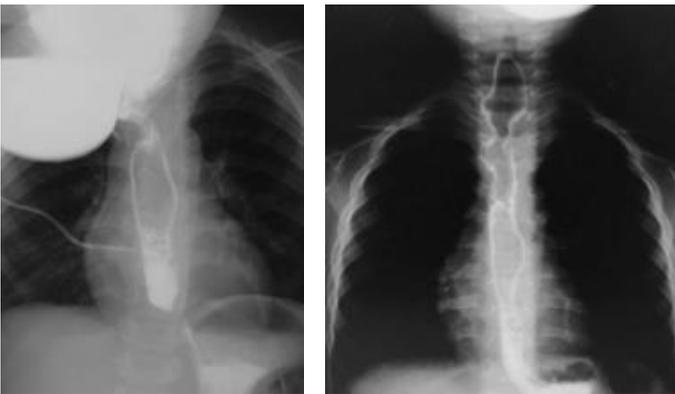


図 4. 食道内異物



バルーン拡張前

バルーン拡張後

図 5. 食道造影